水平の想像力をもつ彫刻

要旨

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程
彫刻専攻領域
学籍番号 1318911 大塚諒平

本論文では、彫刻に内在する力を過剰に恐れ、イメージが定着し、固まって動かなくなる造形的な彫刻をつくることのできなかった私が、彫刻制作のプロセスのなかで見つけた水平の想像力という言葉をキーワードにして彫刻について考察する。そのひとつの見方として、彫刻のインスタレーションとしての可能性を探っていく。

水平の想像力を考えるにあたって重要となるのは、生きている身体である。身体を基準にして、空間を経験すること、事物を経験すること、とはどういうことなのかを論じていく。

１章では、実感できることと実感できないことという越えられない溝をテーマに、ダンサーのシモーヌ・フォルティやブルース・ナウマンの作品を参照にして、作品のなかにおける身体の捉え方を考察する。身体を感じることや他者や素材と接することのなかで起こる交感は彫刻をつくる過程では常にそばにある。彫刻をつくる過程で感受されることはしばしば身体表現のなかでも現れてくる。表現を通して鑑賞者の身体に目を向けさせることは、見るという一方的な視線ではなくなる。自身と対象との関わりかたを意識づけることで止まっている彫刻を、鑑賞者の身体と地続きな世界に引き戻すことができる。身体と対象の関係を捉え直すことで彫刻を身体をもって鑑賞することとはどういうことなのかを考察していく。

２章では鑑賞者と作品、彫刻家と彫刻という一対一の関係ではなく、他の事物と関係線を持つことで出来上がる空間や生態系について考察する。身体をもって鑑賞するインスタレーションははじめから全体を見通せない。それは、この世界を経験することと同じように、空間内にあるオブジェクトたちを鑑賞者自身で関係線を見つけていくなかで秩序をつくりだしていく。その時、鑑賞者の身体は秩序を体系づくる過程で再生成される。空間／場を生成することは、作品や事物を経験する鑑賞者の身体を組み替えようとする作用を持ち、対象を感受できる身体もつくりだされていくということだ。それは、水平の想像力を働かせ、実感できないこととの距離を縮めることにもつながる。さらに、自作にたびたび現れる私室的な空間について分析していく。

３章では彫刻を異なるパースペクティブで見ることで、彫刻の長い時間軸という垂直の想像力だけではない捉え方にする可能性について考察する。ものの持つ情報はもの自体を構成する要素や、そのものに与えられた記号性だけでなく、交感した対象との即興的なやりとりのなかにも存在する。プロセス自体を抜き出すことで、ものはパラレルな存在になり、

開かれていく。開かれたものを鑑賞者が経験していくことによって、鑑賞者の身体も開かれていく。また、彫刻に内在する力を過剰に恐れていた私が、いかにして作品を通してその力を捉え、ポジティブなものとして反転させようとしていたかを分析する。私が抱いた恐れは同時に、彫刻の魅力的な部分であり、可能性でもある。それを、様々な文節にわけ、水平の想像力を持つことで彫刻は垂直方向だけでなく、水平方向へと拡がっていく。

４章ではこれまで考察してきたことを踏まえ、実感できることと実感できないことや身体をもって経験することを通して自分自身をつくりあげていくことをテーマに制作した提出作品について言及していく。

私が彫刻をつくろうとするなかで考えることとなった水平の想像力は、今生きている私たちと異なる時間軸のなかの存在として捉えられる彫刻というものを、身体をもって経験することで、実感をつくりだし、今ここと接続できるようにする力を持っているものであった。